

諸家の兩展覽會談

黒田清輝、和田英作兩氏談

記者會場にて黒田、和田兩畫伯に、今年の白馬會展覽會に關する所感を問ふ。

黒田氏曰、一體に若手が甘くなつた。若手が進歩して我々會員や、幾許か先きにやつてるものゝ作が、若手の作と一所に列べても、そんなに目立たなくなつた、それだけ進んだのです。

和田氏曰、公設展覽會ほど社衚を着た様に固くならないのが面白いと思ひますね、繪は小さいが、作者の畫かうと思つた感興が現はれて居るものがあると思ひますね。

黒田氏曰、そう、それが私設展覽會の特色の一つだ。それから、今度の展覽會には、畫が多くて見悪くいと云ふ非難やら、種々な註文がある様だが、今日の私設展覽會の特色の一つとしては、繪を出す場所を與へて新進の新しき試作を發表させるのも、急務の一つだと思ふ、畫の多いとやなにかは、人に依ては、幾許澤山列んで居たつても、特に或る畫を離して、孤立さして見て呉れる人もあるが、場所の事に就ては、例へば、まだ公設展覽會へ出すまでに至らぬ若手の作や、又た主義の異つた展覽會へは出せぬと云ふ様な事情のある人の作を出して獎勵する場所は、目下大に必要だと思ふ。勢ひ私設の展覽會は、そう云ふ若手の作や、又自分等の主義に最も接近した作を集めて、之を世間に發表することになる、今後追々そう云ふ様な獎勵が普及して、其必要のなくなつたと

きには、もつと點數を減らして、體裁のよいものを開くとの出来る時期が来るかも知れぬ。も一つ、私設の特色は、畫題の突飛なもの、例之へば、熊谷の「轢死」の様なものも、時代の慣例と云ふものか何か知らぬが、又た其慣例の善し悪しは別問題として、兎も角、あんな畫は、何處の國でも、又た何時の時代でも、公設の展覽會では屹度はねることになつて居る、斯んなものは私設展覽會でなくては出すことが出来ぬ。是等のことが、私設展覽會の必要な處だ。

『美術新報』九十八明治四三年六月一日

本文中に登場する熊谷守一の《轢死》(熊谷守一美術館蔵)は白馬会第一三回展(明治四三年五月一〇日~六月二〇日)発表時に注目を集めたらしく、明治四三年五月二六日付『国民新聞』には、「画題になつた轢死美人天才画家苦心の製作」として熊谷の談話が載せられている。同記事には《轢死》が第二回文展に出品するも拒絶された旨が記され、本文獻の黒田の発言とも対応する。熊谷の《轢死》については、小泉淳一「3つの死」(茨城県近代美術館「へたも絵のうち」展覽會 熊谷守一ものがたり)図録 平成十四年七月)、同「象徴主義のつむじ風吹く——青木繁と熊谷守一の青春時代」(『茨城県近代美術館研究紀要』二〇平成十五年三月)を参照。



熊谷守一《轢死》 熊谷守一美術館蔵